

第八号

能林良材集

冬下

春夏秋冬
八卷之舟

~ 5
1257
8



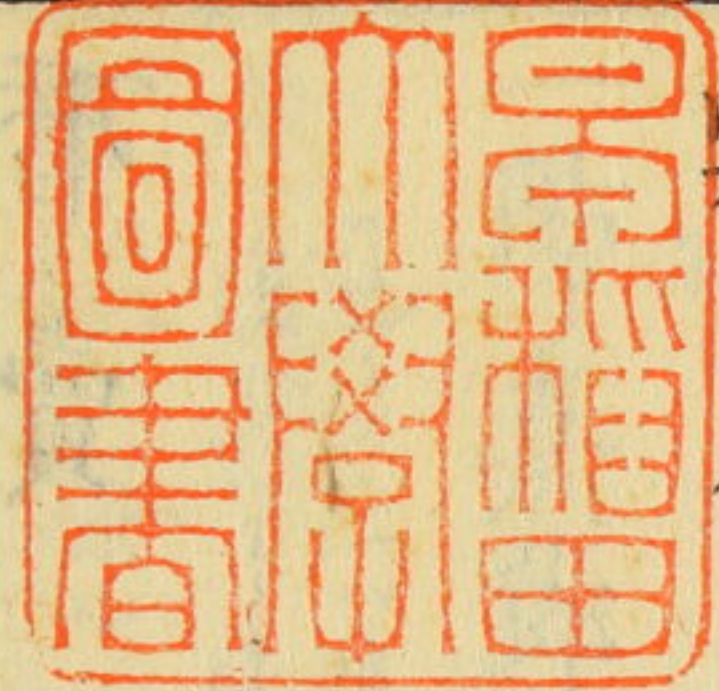
5
1257
8 止

十一月

潜仲冬日月星辰之会斗子之集也辰
子ハ尊ありといふ古ハ陽尊也子ハ更ニ陽中ニ在リ清興
十一月を霜月と云ふ也霜志寒なりと云ふ也急ニ霜なりと云ふ
云儀を誤也

霜月・雪降月・神乐月・雪見月・幸月・天正月
復月・陽月・黄鐘・周正・大雪
周の代ハ天十一月を天正月とせり古正を曆家ハ天正月と
云黄正ハ十一月の律也

霜月



霜月ハ出也... 古梅室
霜月ハ... 縁... 兼堂
霜月ハ... 下... 一...
霜月ハ... 田中... 招... 一

曆奏

公一日十一月一陽始生... 今月中務南より天...

の略... 天聖十四年... 暦賣

暦賣

ふり... 暦賣... 廿六... 廿七... 廿八... 廿九... 三十... 朔旦冬至... 一陽嘉節... 宮線... 歳...

赤豆粥

朔旦冬至... 一陽嘉節... 宮線... 歳...

朔旦冬至... 一陽嘉節... 宮線... 歳...

朔旦冬至

公十一月... 朔旦冬至... 一陽嘉節... 宮線... 歳...

一陽嘉節

增十月... 一陽嘉節... 宮線... 歳...

宮線

晋魏の代... 宮線... 歳...

歳... 増

履^{クツ}ヲ獻ル 履を奉る 履^ニヲ奉ル 履を奉る 履^ニヲ奉ル 履を奉る 履^ニヲ奉ル 履を奉る

冬至

灯のこゝろ... 梅のこゝろ... 赤豆粥... 旭多

赤豆粥

増共工氏の子を... 赤小豆を...

草大根... 人... 方... 優...

相嘗祭

アイムヘノ 相嘗祭... 公上卯日...

宗像祭

宗像祭... 同能宗の御形社... 氏人...

山科祭 上巳日
 平野祭 上申日
 春日祭 同日
 當麻祭 同日
 卒川祭 上曹
 梅宮祭 上介日
 當宗祭 同日
 中山祭 同日
 松尾祭 同日
 大原野祭 中子日
 園韓神祭 中世
 吉田祭 中申日
 日吉祭 同日
 五郎 中世
 帳臺ノ試 中世

公 五郎の葬を主人ありて帝寧殿より天皇以後に
 葬じし御ありしに重衣指母を給ししに御ありしに御ありしに
 以直衣指母を給ししに御ありしに御ありしに御ありしに
 御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに
 乱葬あり

殿上の淵酔

宴日初詠をやりありしに御ありしに御ありしに御ありしに
 宴日初詠をやりありしに御ありしに御ありしに御ありしに

向ふふと

狩の使

ありしに御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに
 ありしに御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに

狩の使 ありしに御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに
 狩の使 ありしに御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに

童女御覽

御覽 ありしに御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに
 御覽 ありしに御ありしに御ありしに御ありしに御ありしに

鎮魂の祭

公 中宮日長天皇天皇の魂魂の経遊を招きく
乃中ノ志ヲモテ御能行リ宇麻志麻治命より

新嘗會

ニ井 ナメ 公 中卯日大嘗会大嘗会の初種を神に奉りせぬふ
義ありて之の穀十二ありて之を相り紫

豊明郎會

トヨ アカリノ 中辰日長天皇天皇の稻を神に奉りせぬふ
義ありて之の稻十二ありて之を相り紫

日吉臨時の祭

中申日長天皇天皇の延暦三年十一月十八日より始りて
上の儀をたてしむるは八月に延暦寺の僧徒

賀茂臨時の祭

酉日小倉大嘗会ありて先皇の御祭ありて
を調へて之をたてしむるは八月に延暦寺の僧徒

よの夜寝たりて夜中へは儀式定儀ありて
儀ありて供養人ありて之の儀ありて
此祭ハ宇多天皇始りて之をたてしむるは
八月に延暦寺の僧徒

東三條の御神樂 下卯日

里神樂

古 巨月
右 青柿
左 聖物子
孤竹
魚藻
九峰
息

降しゆく雪あけし〜
 夕の霞をさ〜
 神はゆも〜
 大降の儀よ〜
 舟大の儀をさ〜
 小忌衣 ヨシコロモ
をまの神・ニハの神をこころに新嘗會の時あ〜
 神多の時に〜
 だ〜衣あ〜

古き世の〜
 優〜

日蔭の糸

日の糸の〜
 日蔭の糸の〜

清き山中の〜
 或ハ緑の糸を〜
 垂る〜
 日蔭の糸の〜
 増

吹風よ日〜
 のけ〜
 葉居
 龜成

神遊の歌

阿知女・採物歌
採〜
 杖・世・弓・太刀・鉾・しき

六・片折・徳孝・葛まき〜
 ちんせ〜

採もの〜
 息
 素心

かゝ神唄

大前張
オホサキ〜
 志ま〜

小前張

・あもあつら・まらや・いそり・さくあも・いりつぎ
・総角・大正・こま・田・きりくま・おせう・皆澤い物之

千歳・早歌・星

・きりくま・いそり・さくあも・いりつぎ
・早立湯立イ・玄狗・新倉山前イ
・屋らつら歌・内取歌大神・お歌いりつぎも本末わらあも

〔梁〕より皆書きこまつまう 増

庭燎

御火焼

〔世〕神楽の庭火焼くんを人あもをまきつらまや
のこりつら

お火焼やあまりのこのる人の歌 佳風

おあつらまのりつらつらまやおの枝 下サ 正月

お火焼や曉あまをまきつらまや 全 正月

庭燎たつらまのりつらつらまの枝のりつら 茶枝子

各五十一

子祭

子日火あく妻のあつらまきあつら二候と記さす
値くま

庭燎焚人の歌さす鏡りれ 優

庭燎まよせぬや庭火の燃焼り 巢吹

子あつらつらや神代の宿の飯煮り 古 月夜

子あつらつらよのまきん料り松の枝 古 正月

子あつらつらやあまのりつらつらつら 古 正月

子あつらつらやあまのりつらつらつら 古 正月

子燈心

子あつらつらやあまのりつらつらつら 古 正月

子あつらつらやあまのりつらつらつら 古 正月

子あつらつらやあまのりつらつらつら 古 正月

各五十一

舟のこゝろ買ふまはるや子燈の 士峰

雲のうら持ふうをいしる燈の 一飛

吹草祭

八日におくのかねるきよはねはいはしあは
りまふまふあり

里まふまふの教の御治屋の系うれ 古一茶

酒市あは吹草まふうの布子ん 後水

初づきまふてのまふ吹草系ん 久栄

燈ををたふまふ吹草まふうん 峰楓

敷くせの居候まき自いふれ 古後物

魚んせの阿のまふりまふくまふい
り

芝居顔 見世

新玉津島の御火焼

十二の五系南島丸の西へ何の五系の子位
後成り何何系玉津島の神を勧進し

ありまはるな衣通照くく和歌をまふうせめは西神あり

空也忌

十三の空也堂極楽院の号を四系坊川の東へ
組空也堂修持の系は

系解をまふ系玉の敷りの後系玉をまふう者くる

再くくまふりくくそ何今日のおまをいそ日とせう

ありまはる用いたまはるを修まはる後中 十八系ありその中

系表の老新敷し衣をまふる修あり代空の字を以修
の字にかまはる修あり新敷せまはる系玉系玉系玉
系玉系玉系玉系玉の後を修ありまふまふまふ
と市中を巡りまふり後外
と味場より

空也忌は修ありまふあまひいそそのまふ 下サ 七系長

中らあまひいそそのまふよりあまひいそそのまふ 下サ 七系長

雪見

雪をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
春のゆくや雪のゆくや雪かん身、 雪阮
雪のゆくや雪かん身、 雪かん身、
雪かん身、 雪かん身、 雪かん身、
雪かん身、 雪かん身、 雪かん身、
雪かん身、 雪かん身、 雪かん身、
雪かん身、 雪かん身、 雪かん身、
雪かん身、 雪かん身、 雪かん身、
雪かん身、 雪かん身、 雪かん身、
雪かん身、 雪かん身、 雪かん身、

雪散

雪散るや地は足つ事ぬ雪の影 山口 景魚

雪風

雪風や去る影もゆく事なく 山口 景魚

深雪

深雪のゆく事なくゆく事なく 山口 景魚

斑雪

梅もぬれぬ雪もぬれぬ事なく 山口 景魚

雪志

雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并
雪志をみりて思ふぬおしり雪かんり春 下月并

入海や踏まはるる雪志ゆく事なく 山口 景魚

沖の帆の影もゆく事なくゆく事なく 山口 景魚

峰のゆく事なくゆく事なくゆく事なく 山口 景魚

雪吹

吹あがる雪のゆく事なくゆく事なく 山口 景魚

年出を新端を通る雪の川
ちよ新雪の川を流るる雪の川
たじろ雪
里の子は離子やちよ雪
茶味

雪^{ユキ}作^{オコシ}

年^年の地^地より雪^雪あふらん
庭^庭なる雪^雪あふらん
痛^痛むもの^{もの}の^の雪^雪あふらん
氷^氷雪^雪

雪 礫

雪^雪の^のち^ちの^の雪^雪あふらん
人^人の^の雪^雪あふらん
雪^雪の^の雪^雪あふらん
布^布身^身

雪^{ユキ}あはし

見^見る^る雪^雪の^の雪^雪あふらん
布^布身^身

雪 佛

降^降雪^雪の^の雪^雪あふらん
雪^雪の^の雪^雪あふらん
文^文親^親

雪 達摩

り^りの^の雪^雪あふらん
茶^茶物^物自^自然^然

雲^{クモ}

又^又の^の雪^雪あふらん
枯^枯木^木の^の雪^雪あふらん
雪^雪の^の雪^雪あふらん
雪^雪の^の雪^雪あふらん
雪^雪の^の雪^雪あふらん
雪^雪の^の雪^雪あふらん

輝ちくちく水は氷うき雪うきう
 松の葉結くちく雪うき氷うき
 雪うき岸のふきの氷うき草
 結積ふり敷きうき厚氷
 氷うき雪の敷き雪うき草の光
 雪うき氷うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき

山子

水白

雪柳

氷

今

然比

雪像

氷

氷

冬

氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき
 氷うき雪うき雪うき氷うき

万像

三四

古棠

柏翠

心古

峰風

四柳

葉素

雪柳子

冬

冬椿

何れもあつて何れもあつて甲の永 蓬菊
 物まける取を喰ふと鳥の形 氷雀
 丹垣のつらういづれもわあつとまき サキ の唇
 うつれ家の冬を喰ふと枝の丸 ハシ 勇賢
 雪帯をなまのうさくや冬椿 曾次
 みるまや酒赤の枝まじりうらり 峰風
 強波はまじりてまじりてまじりてまじり 優く
 めつらういづれもあつてまじりてまじりてまじり 中松
 咲山ちまじりてまじりてまじりてまじりてまじり 仙月

冬の梅

葱 ニガ

冬の梅はやくも廣き下やまき 實鶴子
 うつらういづれもあつてまじりてまじりてまじりてまじり 白龍
 葉まじりし垣赤のまじりてまじりてまじりてまじり 下サ 山喜
 一輪も等閑まじりてまじりてまじりてまじり 上サ 柏葉
 このまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじり 優く
 うつらういづれもあつてまじりてまじりてまじりてまじり 上サ 素然
 葱一握まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじり 上サ 素然
 葱一握まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじり 上サ 素然

命よりを火とせし 以てやせしり
 里に廣しきて名も 物も葱針り
 名も名も深し 葱の何れも物
 命も命も深し 自ら根深し
 葱一把使る火のを 出さるを
 伏せ柱のいつら 伴つて様子の子
 志もくく眼もついで 洗ひ葱
 葉もよもよも あり何の葱も
 仲もくく葉末の 枯る葱も水
 葱玉
 秋之
 文記
 古堂
 佐藤
 松本

狩

狩場の難・の里との事

しいとやせし 霜毎は味のまじ
 五川
 優く
 葉吹

列卒繩

藻 若竹は縄を引く 若を遣出さるる とうり 鷹狩
 追をらしめたる 列卒入りの 勿論あり せぬありあり

鷹道の七卒の六

列卒繩やせし 事あり 九折
 佳音

鷹

鷹狩・ありし中の 鷹・若鷹・大鷹 河の舟の鷹
 としついで 網屋の鷹あり 何れも とうり 大鷹は 見たり

偷起鳥

年ぬき... 鳥の... 盗み... 鳥の... 盗み... 鳥の... 盗み...

鳥叶

鳥の... 葉... 枝... 葉... 枝... 葉... 枝...

鳥立を慕ふ

鳥の... 慕ふ... 鳥の... 慕ふ... 鳥の... 慕ふ...

教草

教の... 草... 教の... 草... 教の... 草...

力草

力... 草... 力... 草... 力... 草...

カ州... せぬあり

中つ苗も... 業史

中つ苗も... 東雪

山あらし... 梅葉子

雪あらし... 葉居

雪あらし... 優く

小窓... 双岳

退鳥狩 暖鳥

古歌... 暖鳥

妻を... 水

あま... 傳く

木... 月忌

放... 一飛

寒苦鳥

未練... 古急

あ... 峰風

才... 一飛

あ... 鳥五

油... 鳥和

鯨

雪車

小里六つ、程ぬき、のり、こり、れ
世負
おふ、く、雪、車、の、の、り、こ、り、れ

雪車、や、上、車、の、馬、車、を、下、り、坂
サカ、標、堂

雪車、は、く、や、款、の、ふ、よ、あ、き、い、は、を
下、サ、巾、南

雪車、の、次、里、ハ、市、り、知、り、せ、ら、る、

雪車、お、き、し、く、と、毒、の、毒、火、水
田、且

葉、つ、く、雪、車、は、く、風、の、生、き、危
笑、水

お、お、く、よ、ま、む、家、あ、り、く、と、雪、の、次、

と、雪、車、の、雪、を、吹、く、し、き、危
下、サ、是、月

雪車

押、き、是、よ、か、成、り、く、事、や、坂、の、雪、車
思、成

雪、車、や、雪、車、引、換、一、門、の、外
柏、翠

櫛

雪、車、の、雪、を、吹、く、し、き、危
の、り、こ、り、れ

櫛、の、や、り、櫛、は、く、と、毒、の、毒、火、水
茶、枝、子

櫛、や、ち、の、き、端、ハ、や、り、く、事、や、

櫛、の、あ、り、は、り、く、あ、り、く、と、雪、の、

櫛、や、ち、の、き、端、ハ、や、り、く、事、や、

櫛、の、雪、を、吹、く、し、き、危
丹、月

の、り、こ、り、れ、雪、車、の、雪、を、吹、く、し、き、危
素、月

熊突

雪の中熊の穴を穿つて出るを
いふ事なり

熊突のそ尾くう何子焚火が 峰風

くまのしきいすのたてをよぶ事なり 如白

鮎

江川の産あり大きくなるその鱗一寸虫がすすむ事なり
阿の取口をきく尾のたてをよぶ事なり
くまのしきいすのたてをよぶ事なり
魚人多く出せる事なり

くまのしきいすのたてをよぶ事なり 古子那

是れはくまのしきいすのたてをよぶ事なり 優こ

花の中へ風よふ事なり 鮎のそ尾 巢飲

鮎鰈

鮎鰈の味は雪風よぶ事なり 卜外

氷鮎

鮎鰈や燈籠はけりし新の釘 莞尔

意のちやういふ事なり 氷ふた 世負

杜父魚

風山よまき 鮎の少なるりの雪のちやういふ事なり

このぬらや後をよぶ事なり 降 亮 古拙候

杜父魚やいふ事なり 中をよぶ事なり 茶山

うらやうや西風清き夜明け候 梅 頑

茶喰

あまの糖くくく事なり 喰 智 幽

この時何おもはる事なり 茶喰 葵 史

王子酒

つぎくまのしきいすのたてをよぶ事なり 茶山

生姜酒

茶の友に... 柳佳

黄凍コリ

根あろりの新... 凡量

十二月

潜 季冬老日月玄極は念し... 十二月

清眞... 十二月... 師走

師走

日向くや... 師走... 十二月

雪ふる清き山は雪きしは走りぬ カヒ の終
 夜ふくりの上よりぬるは走りぬ 下サ 月杵
 空より清き山は走りぬの書来、孤眠
 雪風もさうなまきぬるは走りぬ、庭を
 地ふきぬは走りぬの牛車 素山
此國思の何りこころさき
 海へは走りぬの斗のは走りぬ 葱玉
 木の青も山をぬるは走りぬ 素山
 何れも走りぬの山は走りぬ 清山

乙子の朔日 イムヒ 人のこころを走りぬ 一龍

忌日の御飯 オホカ 御飯 あま

大神祭 あま

天智天皇御國忌 三日崇福

御躰の御卜の奏 十日六月

月並の祭 十一日

神今食 あま

山をぬるは走りぬの神々 不鳥雪

御佛名 十九日より大なりやうに二ヶ日に奉成の御佛名を定めしむるに
御佛名 御佛の御名を定めしむるに
を減さしむるに

先樂の御名 御佛名 古 去來

重なるを御名にせしむるに 御佛名 龜成

被^カ綿^ケ 公名の御名にせしむるに

元及ぶも時の御名にせしむるに 御佛名 葉居

子代へも代の御名にせしむるに 御佛名 契史

身よりも時の御名にせしむるに 御佛名 葉欣

身よりも時の御名にせしむるに 御佛名 素人

栢梨^カ勸^シ盃^ハ 勸盃はの御名にせしむるに 御佛名 敬上

御髮上^ハ 下年日衆人の御名にせしむるに 御佛名 公

大切なる御名にせしむるに 御佛名 新月子

中なる御名にせしむるに 御佛名 優

土牛童子の像を立^ハ 古より日衆上人の御名にせしむるに 御佛名 十二門

荷前^カの使^シの定め^ハ 十二日衆人の御名にせしむるに 御佛名 拾

善獸の政^ハ 換非遠使以下の御名にせしむるに 御佛名 八

内侍所御神樂^ハ 増天子内侍変へり奉りし御名にせしむるに 御佛名 刀

内侍所御神樂^ハ 増天子内侍変へり奉りし御名にせしむるに 御佛名 刀

事始

以先のりやあつらひのめめりうぶ
横の戸もせまきよまをけりる路め
子始物もせまきよれり初り水
吹をきき海のやうとやう始、峰、風

齋宮の繪馬

吹りぬむのむまの樹下及の傍は少初りうを言
里入り夜神へ絵馬をこころるるりあり

絵馬のやうつとまの木のくまき
龍狩

追 儼

吹り・鬼やうい・あやうらうま
驅儼・爆中

○公舎人寮鬼をつとむ陰陽寮寮文をよ敷の庭まよまを
と下鬼をよ敷上人掩のろり芦のまよまを射るるりあり
○唐のりも夜神をよ敷まよまは浪子の毒懐鬼衣まよ驅儼まよ
り又爆中をせり書

追儼をる神やあめりよ抄るる
得友

戸車や追儼海せり夜の色
素心

よ初やうよ日のまよま清く追儼く
素心

鬼やうい 素心
鬼やうい 借水

九重のやうの上も鬼やうい
儼く

神の燈や初まよまや鬼やうい
巢吹

まよまあやうのまよま初まよ鬼やうい
五川

まよまあやうのまよま鬼やうい
上サ 怪聲

郎分

立妻のあひかり

昔分のあひかりにえりし梅二つん

素力

豆打

豆打をたけの隈をえりしむら

ツカ一海

豆打しきりしむらぬ夢の糸

丁三板粒

中め打やあき男のきり月懐

色好

菊やきりしむらぬ鬼の外

油静

糸くしきのきり懐をや鬼ハ糸

格取

投入の梅をえりしむら福ハ内

峰風

於挿

於挿をえりしむらぬ新ハ堂

仙月

五條天神祭

志守のむらもをけら五條天神少老名布き茶
の鞠をえりしむらぬ神のや世はあきりしむらぬ
昔分の中をえりしむらぬ神をえりしむらぬ
たき茶あきりしむらぬ神をえりしむらぬ
是をたきりしむらぬ神をえりしむらぬ
是又世はあきりしむらぬ

大原雑喉寐

年山城必老岩部於挿をえりしむらぬ
名大原むらぬ神後寐は地井子村於大園に云也
蛇をえりしむらぬ男一女一変り集里園に云也
神をえりしむらぬ男一女一変り集里園に云也
神をえりしむらぬ男一女一変り集里園に云也
神をえりしむらぬ男一女一変り集里園に云也

吉田神のお殿より吉田の女男女多し... 江文の神の社あり

鯨の首よりおとく... 喉痛ふ 峰内

板もたきの... 昔岳

寶船賣

船は書とる舟を念のりよ... 寶船賣

買ふも... 宝船

買ふも... 宝船

買ふも... 宝船

鯛の頭を挿

土 出の門のあり... 鯛の頭を挿

二匹の鬼... 鯛の頭を挿

人を... 鯛の頭を挿

鯛挿

飯後... 鯛挿

あま... 鯛挿

吉田の大枝

首から... 吉田の大枝

厄落

甲二の厄お... 厄落

持ちし人の... 厄落

厄拂

戸をあらうさいまや表より厄拂 上
引くまゝの厄をいひし厄をいひ、東電
おのりかゝる厄をいひせつゝ、鐘、是調
年をいひてまゝのまゝもや厄をいひ、市笠
美事くはる方様よりや厄拂、竹囊
又まゝの目一考あり厄をいひ下サ
結の書きまゝなり、りり厄をいひ、玉頰
又いひのうまゝのまゝにしや、拂、米名
おとやうれ世の縁ひや厄をいひ、米名

卷八十五

貳の札

貳の札

店井のまゝに、茶をいひ、厄をいひ、上ナ 柏葉
おのりかゝるまゝに、仕やのや厄拂、梅雪
寝まのまゝに、いひ、みや、まゝに、ヒナチ 菱式
依拂の海まのいひ、や、まゝに、下色 山古
依のまゝに、いひ、まゝに、厄をいひ、優々
まゝに、いひ、まゝに、厄拂、甘茶

貳の札 友

小寒の節

十二月の節
あり

大寒の節

十二月の中
あり

鶺鴒始巢

鶺鴒カサキキニテスウは十二月の候カサキキニテスウに巢カサキキニテスウを築カサキキニテスウくはる。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

雞乳

月カサキキニテスウは十二月の候あり

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

年内
立春

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。鶺鴒カサキキニテスウは冬鳥にして、冬にのみ見ゆ。

小晦日

思成
一飛
文種
花酒
あつたありのりあり

優こ
紫松子
素月

除夜

年の暮・菜末・菜尾・雪草・大蛇の・除家・竹草
海・年・年・つ・晩年除夜・大蛇の・夜を云・年の

美志之礼除く
り義あり

古
片雪
三ノ
其
東
丹珠の
福壽科
冷
雪
霞
仙
一
芳
除夜の
互の
世
を
う
る
危
榮
葉
子

歳の暮

枕しそ字人も何う除ねりけり 甘茶
 鐘ゆきふくしむるや除ねりけり 庭を
 限りたるやうは降る降ねの雪 一飛
 名出たる舟入りり年の暮 葉落子
 年の暮よあめももとの暮 賀勢子
 降る相の候りしつりや年の暮 八風樓
 空をわたる葉もも真かや年の暮 イツ末久
 きて葉のの葉中をまゐるや年の暮 葉居
 きりぬはりのつきの葉居るれ 末郎

年の関

市中や人の世ももも年の暮 六 浩風
 年の暮あつちの暮しての形 接衆

年の末

吹よもりしりしおのををいし年の暮 連理子
 親何うしてはるもりあけり年の暮 素心

年の名残

ふしきよあつちをを年の暮 葉史
 梅をうらなうつはる年の暮 葉居

やうあめがよはあつちの暮 如白

歳の尾

年の尾の尾 ときをいきり新八 喜鳥五

年の尾や小窓より水ぬく通る
 梅 枝
 流る年
 加茂川や水の中を流るる年をむすむ
 東 自 長
 年の浪のまをゆくりもあつりり
 ヒタチ 晴 河
 暮る年
 夢の世は夢よりあつりり
 ムツ 葉 史
 大晦日
 鏡よよめしやれやめあつりり
 トナリ 外
 年の関
 心も月もまき入らぬ
 ムサシ 文 種
 いまつりりよまき入らぬ
 大晦日 葉 葉 子

葉の影もあつりり
 大晦日 葉 葉 子
 月夜もあつりり
 大晦日 葉 葉 子
 行年
 水ぬく通る年
 葉 葉 子
 梅の影もあつりり
 葉 葉 子
 年の尾や小窓より
 葉 葉 子
 水ぬく通る年
 葉 葉 子
 加茂川や水の中を
 葉 葉 子
 流るる年をむすむ
 葉 葉 子
 東自長
 年の浪のまをゆくり
 葉 葉 子
 もあつりり
 葉 葉 子
 暮る年
 夢の世は夢より
 葉 葉 子
 あつりり
 葉 葉 子
 大晦日
 鏡よよめしやれや
 葉 葉 子
 めあつりり
 葉 葉 子
 年の関
 心も月もまき入らぬ
 葉 葉 子
 ムサシ 文 種
 いまつりりよまき
 葉 葉 子
 入らぬ
 大晦日 葉 葉 子

玉 祭

徒あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を枕やけり葉をさ
さく人のくをいんかよあまをいんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る
あり報十月はるのなけり玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る
増

岡 見

堀あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る
あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る
あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る
あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

思ひをいんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

よれをいんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

月をいんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

井 田

門 林

春 田

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

月をいんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

春を待

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

春を隣

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

春を隣

あまをいんのかうを夜しんて玉を祭る玉を祭る玉を祭る玉を祭る

餅花

餅つきや餅つきもちの餅花の餅と
 めさやきや白しやもち選
 きり餅の餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅

丸九十二

乾^{カラ} 鮭^{サケ}

衣 配

餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅
 餅つきや餅つきもちの餅

正月の餅つきを子孫親族の餅つきもち
 餅つきや餅つきもちの餅

萬事をく揮く人ありし 三六 白
 ありき 一 ち 二 や 三 投 四 しの 五 一 六 幕 七 系 八 自 九 長
 衣 一〇 次 一一 出 一二 の 一三 影 一四 や 一五 止 一六 拂 一七 一八 卜 一九 外
 様 二〇 も 二一 き 二二 や 二三 雇 二四 の 二五 人 二六 よ 二七 あ 二八 り 二九 せ 三〇 む 三一 一 三二 庭 三三 是
 掃 三四 の 三五 一 三六 毎 三七 の 三八 何 三九 止 四〇 し 四一 や 四二 止 四三 拂 四四 四五 唯 四六 囊
 節季候の母 四七 月 四八 相 四九 逢 五〇 止 五一 月
 節季候の母 五二 月 五三 相 五四 逢 五五 止 五六 月
 節季候の母 五七 月 五八 相 五九 逢 六〇 止 六一 月
 節季候の母 六二 月 六三 相 六四 逢 六五 止 六六 月
 節季候の母 六七 月 六八 相 六九 逢 七〇 止 七一 月
 節季候の母 七二 月 七三 相 七四 逢 七五 止 七六 月
 節季候の母 七七 月 七八 相 七九 逢 八〇 止 八一 月
 節季候の母 八二 月 八三 相 八四 逢 八五 止 八六 月
 節季候の母 八七 月 八八 相 八九 逢 九〇 止 九一 月
 節季候の母 九二 月 九三 相 九四 逢 九五 止 九六 月
 節季候の母 九七 月 九八 相 九九 逢 一〇〇 止 一〇一 月

婆等

節季候の母 一 月 二 相 三 逢 四 止 五 月
 節季候の母 六 月 七 相 八 逢 九 止 一〇 月
 節季候の母 一一 月 一二 相 一三 逢 一四 止 一五 月
 節季候の母 一六 月 一七 相 一八 逢 一九 止 二〇 月
 節季候の母 二一 月 二二 相 二三 逢 二四 止 二五 月
 節季候の母 二六 月 二七 相 二八 逢 二九 止 三〇 月
 節季候の母 三一 月 三二 相 三三 逢 三四 止 三五 月
 節季候の母 三六 月 三七 相 三八 逢 三九 止 四〇 月
 節季候の母 四一 月 四二 相 四三 逢 四四 止 四五 月
 節季候の母 四六 月 四七 相 四八 逢 四九 止 五〇 月
 節季候の母 五一 月 五二 相 五三 逢 五四 止 五五 月
 節季候の母 五六 月 五七 相 五八 逢 五九 止 六〇 月
 節季候の母 六一 月 六二 相 六三 逢 六四 止 六五 月
 節季候の母 六六 月 六七 相 六八 逢 六九 止 七〇 月
 節季候の母 七一 月 七二 相 七三 逢 七四 止 七五 月
 節季候の母 七六 月 七七 相 七八 逢 七九 止 八〇 月
 節季候の母 八一 月 八二 相 八三 逢 八四 止 八五 月
 節季候の母 八六 月 八七 相 八八 逢 八九 止 九〇 月
 節季候の母 九一 月 九二 相 九三 逢 九四 止 九五 月
 節季候の母 九六 月 九七 相 九八 逢 九九 止 一〇〇 月

寒念佛

寒念佛の歌をいふてくるる

中儀

寒曝

寒曝の歌をいふてくるる

優く

寒造の酒

寒造の酒の歌をいふてくるる

分貴

寒造の酒の歌をいふてくるる

巢欣

年籠

伊勢の神をいふてくるる
伊勢の神をいふてくるる
伊勢の神をいふてくるる
伊勢の神をいふてくるる

伊勢の神をいふてくるる

一歌

年忘

年忘の歌をいふてくるる

鳥代め

年忘の歌をいふてくるる

疾丸

年忘の歌をいふてくるる

善洋

年忘の歌をいふてくるる

下丹 玉清

年忘の歌をいふてくるる

貞忠

穀のうす塵をおきくく古層 石由

遠のうす小室一層の表をさあ 優く

早咲の椿 可後より神の是くぬつをきく ニナ 知是

可き起の枝ありしをうつり 下ナ 西具

早梅 室梅・流梅・可後の枝

可後の枝よ室梅の是くく 世負

可後や佳ふ室梅の是く 葉底

可後より人よ室梅の是く 子布

可後の枝ありの是く 下ナ 山臺

古層

可後の枝よ室梅の是く 合レ 田左

可後の枝よ室梅の是く 波目

可梅や可室梅の是く 上ナ 相

可梅や可室梅の是く 優く

寒梅 室梅や可室梅の是く 甘茶

寒椿 室の可室梅の是く ハサレ 物株

孟宗竹 冬筍あり

室の可室梅の是く 素人

室の可室梅の是く 不年

寒竹の子

井の多や凍るくうらむの中

葵史

空井や雪のつち中しまのそら

下サ 雪志

冬志のめ空竹の多結をそら

巢吹

空井や雪をねあふまのそら

△セ 雪英

追加

貝焼や足の色もそらあつち

仙月

救りれらむる世もそらあつち

月憐

表をゆふそらぬ顔あつちのそら

聖路子

物あつちのそらの色や雪のそら

庭花

大町の庭を日あつちのそら

水壺

冬百終

雙雀尾のある一羽井の介越入

てうら林業の樵たれるとのよ

四時の末そらそらのめぬの棟梁の雪のぬ

をあててそら國越をうらあそら

あつち詞をあそらあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

下りし心なきのく木より竹を打
おんていさあ忘りしを結ぶを志
あり魂の志あきしそ

末の心一仲冬為山

总書

冬未一

唐河不繁河乃正風有枯
美在耐属物ら程くを佛
是能蹤亦堅固亦中亦殊出
毎自然消穉るに世人淑安乃
順心よらの物亦此以是痛

能痛下遇之幸慶西壁
乃望際以效比席中亦就
下諸國乃夙子於需不聯
白下夢於妙智力成能
志九事如之乃物在子亦
之免自他亦比度其數道以
依此乃本為之者一能
之此良材集之乃其未連
之其無之現在乃其子於其路
其乃其數畢的其乃其未其於
其乃其未傳其乃其道守之為其方
其乃其形其其言下其大悟

石塚村 序所庄作持
安政三未乃冬 葱玉

七十七為 神龜之 綱

石塚村 序所庄作持

冬未三

三都 狸々拜

玉	小	須	岡	山	須	河	秋	勝
屋	林	原	田	城	原	内	田	村
久	新	屋	屋	屋	屋	屋	屋	治
五	兵	伊	嘉	佐	茂	喜	太	右
郎	衛	八	七	兵	兵	兵	右	衛
版				衛	衛	衛	衛	門

書林

ウハ
11-01/110-11

中須城郡

石塚村

尚彌郡 狸

櫻塚邑

赤里堂